



Title	「今の対話は全く哲学的探求になってなかった!」
Author(s)	堀江, 剛
Citation	臨床哲学のメチエ. 2002, 10, p. 19-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10993
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「今の対話は全く哲学的探求になってなかった！」 堀江 剛

私が出席したワークショップ・SDは次のようなものであった。

1. Socratic Ignorance and the 'non-intervention dogma' 本来このワークショップは、オランダのプラクティショナー Hans Bolten が計画し行なうはずのものであったが、彼は急用で会議には参加できず、ピンチヒッターとして Karin Murris がこのワークショップを行なった。ねらいは、SD参加者の対話に対するファシリテータの「介入」の問題を、実際に行なわれるファシリテータの観察を通して考えること。二時間程度のワークショップの中で、短い一時間のSD（ファシリテータ：Karin）に参加する者（10人程度）とそれを観察する者（5人程度）に分け、残り時間を全員で「そこでファシリテータはどう振る舞ったか」についての議論に費やした。

この短時間SDで、実際にグループ全体の議論の流れに抵抗する一人の参加者が現れ、ファシリテータがその「問題参加者」に対してどのように振る舞ったかに焦点が当てられた。無理にその問題参加者の発言を止めさせようとしたか／しなかったか、どのような条件においてファシリテータは参加者の発言にストップをかけ（介入し）ていたのかなど、SDのファ

シリテーションについて議論が行なわれた。Karinは、問題参加者を無理に黙らせることなく、時間の制限や他の参加者への配慮をしながらファシリテートした。その意味で、つまりファシリテータが上手すぎて、ワークショップのねらいである「介入」の問題を深く掘り下げるには至らなかった面も否めないが、ワークショップ全体としては上手くできていた。

2. SD and Medical Ethics オーストラリアでSDの生命倫理（医療倫理）へのアプリケーションを実践している Stan van Hooft と、イタリアで同じ関心でSDに関わっている青年 Paolo Doridoni との共同ワークショップ。Paolo の実際の経験（目医者について眼鏡を変えるよう適切に説明してくれ、おまけに雑談にもつきあってくれたという経験）を例にして、「医療者と患者との関係が上手くいくのはどんな時か」を問いに短いSDを行ない、答えを出し、その後で生命倫理における「原則主義」と「徳倫理」との対立、具体例に基づいた倫理問題の探究について議論した。

Stan のねらいは、生命倫理で問題にされる「倫理原則」を実際の具体例を通して参加者がそれなりに確認できることを示すことであったと思われる。実際、上の短いSDでも、全く他愛もない例から、

ワークショップの参加者は「患者が治療される時／患者が理解したとを感じる時／患者が十分に説明されたとを感じる時／医者と患者の両者が満足したとを感じる時」といった、まるで教科書にあるインフォームド・コンセントの理念をなぞったようなきれいな答えを出した。

このような、具体例を通じた倫理的一般原則の「確認」作業としてのSDは、生命倫理をリアリティをもって考えさせる（また教える）ためには、おそらく十分に有効なものであろう。つまり、生命倫理にある種の「教説＝ガイド（ライン）」として頭で理解・適用しようとしたり、生命倫理なんか医療の特殊な問題なんじゃないの、と頭から無関心であるような人々に対して、いやいや生命倫理は私たちの具体的な生活上の一般的な倫理観をベースにして成り立っているのであり、それを再確認するものなんですよ、と説得的にデモンストレーションする作業としては、有効であろうと思う。しかし実際の生命倫理上の「問題を解決す」る作業として、またそのために必要な現実的なガイドラインを作成する作業として、SDでどこまで成果があげられるかは疑問である。また参加者の見出した「一般原則」の歴史的・イデオロギー的な前提を批判的に吟味することは、たぶん上のような仕方でSDをやっているようでは、全く不可能である。そんなふう考えた。

要するにSDは、日頃医療や福祉に関わっている人々（従事者・利用者）への「生命倫理教育」としては、あるいは生命倫理上の問題を従事者・利用者の間で差し当って共有・確認する作業としては、ある程度の効果は望める（それは大切なことではある）が、生命倫理上の「問題解決・

批判」の場面でどのような力を発揮できるかは疑問である。この辺りの「SDの限界」と限界を知った上での活用を、十分に考えなければならないと思った。

3. Ethics, Economics and the Third Sector

メキシコでSDを実践するインテリ Fernando Leal の講演。大会基調講演の一つ。SDとは直接関係ないが、今日の「第三セクター」が直面する組織的・経済的な問題を俯瞰した興味ある講演であった。経済的な問題を「public/private choice」（政府の政策とビジネス）の問題として定式化し直し、public choiceの歴史的な変遷・変容を解説するとともに、今日の「第三セクター」におけるpublic-ethical choiceの役割を説く。ここで言う"ethical"とは、やはり一定のパブリックな福利を想定した「チョイス＝選択」の問題のことである。

4. How can SD work in Japanese civic society?

寺田さんのペーパー・プレゼンテーション。日本人社会では「ハーモニーを大切にする」が故に「論拠(argument)を避ける」傾向にあるが、それは今日の多様でグローバル化しつつある社会では、通用しない場合が多い。そこで日本でSDを行なって「論拠を明確にする」コミュニケーションが重要な意味を持つ。また、対話における合意には、もう一つ高いレベルでの"meta-consensus about search for truth"が必要であり、それは対話を経験することで成長する。それは単なる合意と区別しなければならない。このような寺田さんの主張に対して、日本人社会は如何に不思議な（またすばらしい：なぜなら意見の対立なくハーモニーに達することができるから）ものか

に関心がよせられた。ヨーロッパ人は、そういう自分達にはない（と思い込んでいる）コミュニケーションの仕方をしきりに知りたがる。私は、日本人がすべてこのような仕方でもコミュニケーションしていると考えてるのは一面的な見方であると彼ら／彼女らを牽制したが、どうも上手くは説得できなかった。

本当は、寺田さん理論的な主張に関してもっと深い議論がしたかった。コンセンサスとメタ・コンセンサスを区別するのは、対話を上手く進行させる上で非常に有益な視点だと思う。しかし、それがどうして"about search for truth"であるのか、そのあたりがよく分からない。別に「コンセンサス／メタ・コンセンサス」の区別だけでいいじゃないか、と私は思ってしまう。

5. SD Methodology Workshop (two-day SD) パートBでは、通常にSDを行なうものと、SDの方法論に関するワークショップを行なうものの二種類あった。私は"two-day SD"も"one-day SD"も、この方法論ワークショップに参加した。まずはホルストたちドイツの若手を中心となって組織する"Kopfwerk Berlin"のワークショップである。

彼らはSDのプロセスを「適切な最初の問い（テーマ）の決定場面」「適切な例の選択の場面」「選ばれた例のどこに焦点を当てるかという場面」「そこから抽象を行なう（一般規則や原理を見つけだす）場面」の四つに分け、それぞれの場面において（特にファシリテータが）注意しなければならない問題を示し、それを毎回別々の4-5人の小グループで話し合い発表するという形でワークショップが行なわれた。小グループはたいてい四つでき

たので、ワークショップの参加者は16-20人であった。

彼らの発想は、一言で言うと「ファシリテータが如何に対話を適切にコントロールするか」である。そのための課題をチャート式に構成し、ファシリテートの方法として確認・分析する。それは、対話で生じうるハプニングや例外的・問題的事柄を極力排除するような方法である。それらを細かにリストアップすることである。確かにこれを一通り理解すれば、初めての人でもそれなりに「秩序ある」SDをファシリテートできるし、理論的に一貫したSDに関する理解も得られる。その意味で、ファシリテータの短期促成養成やSDプロセスの（差し当たっての）形式的把握にはうってつけである。またそのリストは、初心者でなくともファシリテータの注意点として整理されており、持っていて悪いことは全然ない。さらに、これによって「人の行為・判断に関する一般的規則・原理の発見」というものが比較的安定した形で得られる。しかしそれ以上のものではないと思った。むしろこれを鵜のみにして忠実に遂行したら、型にはまっただけの対話が進行するだけで、SDの参加者は違和感を覚えるのではないかと思った。



休憩時間に話し込む
(イギリスフォトアルバム4)

私は、彼らのSDに関する形式的な理論に（特にその全体的な構造 - プロセスとして提示される「行為・判断に関する一般的規則・原理の発見」という考え方に）少なからず疑問を持っている。対話で生じているのは、そしてそれを生き生きしたものにしていないのは、これとは全く別のことではないのか。それを全くそぎ落としてしまう理論なのではないのか。一般的規則・原理（あるいは真理）の発見というよりも、対話の中で参加者は何か新しい変化（思考の枠組の変化？）を見い出しているのではないのか。そう思って（後で個人的に）ホルストに疑問をぶつけてみたら、「だってそれは偶然にしか生じないことじゃないか」と一蹴されてしまった。これは、次に述べるオランダ人プラクティショナーの考えと、全く異なる発想である。

6 . philosophical investigation in a SD (one-day SD) オランダでSDや哲学カウンセリングを実践しているDries Boeleのワークショップ。例が選択された後のSDの局面で、どんなことが起こるのか、それを「哲学的探究」として生じさせるとは如何なることなのかを、実際にDriesや他の参加者がファシリテートしてみながら考える方法論ワークショップである。

最初に数枚の絵や写真を見せて、多数の参加者が興味あるものを一つ選んだ。それがSDの「例」となる。そして、その一枚の絵(写真)を見て参加者が思うことを自由に述べ、そこからグループの「テーマ」を見つけ出す。さらに、絵（写真）とテーマとの関連を探究する。このプロセスを、最初にDries自身が、次にワークショップ参加者であったStan van Hooft

が、その次にAntoniaというイギリスの女性が（この間Driesは観察者となって対話には参加しなかった）、最後に再びDriesがリレーするかたちでファシリテートし、それぞれのファシリテートの仕方と「哲学的探究」との関連について議論した。我々参加者が見つけたテーマは"Aesthetics of the picture"（「その絵における美(学)」）というものだった。参加者は全員で8人であった。

まず興味深かったのは、例が「絵」（写真）であったこと。そして例から参加者がテーマを見つけ出すという手続きを経たことである。このような仕方はもともとSDにはない。上手く言えないが、絵（写真）を例にしたSDでは、参加者の「知覚」と「思考」との間にある「フィーリング」や「センス」の問題が噴出して面白くなるのではと思った。今度是非やってみたい。

それからAntoniaがファシリテートした後の議論は迫力あった。彼女はSDには参加したことはあるがファシリテートの経験はなく、しかも議論のなりゆきでなんとなくファシリテータの役目を引き受けてしまった。また彼女がファシリテートした局面は、例とテーマとをどのように結び付けるかという難しい場面であった。結果は、SD慣れした参加者Stanがリーダーとなって、思考／美／対象の質といったカテゴリーをその場で考案し、このカテゴリーをもとにそれまでの参加者の言明を見直す作業をしようということで、とりあえず落ち着いた。ところがこの局面での対話について議論しようとしたとき、Driesは「今の対話は全然、哲学的探究になってなかった！」と切り出し、ファシリテータが参加者の間にある（小さな）Dissensusに着目しな

かったこと、抽象の細やかなステップではなく誰かの提示したカテゴリーに頼って対話を進めたことなどを指摘した。これに対して対話をリードしたStanは、そうはいっても時間の制約はあったし、一定の対話による合意を経ていたと抵抗し、二人の言い合いは続いた。またそこにドイツの熟練ファシリテータ Dieter Krohn も入って、議論は休み時間を忘れてさらに白熱した。

オランダ (Dries)、オーストラリア (Stan)、ドイツ (Dieter) それぞれ年季の入ったファシリテータが、これほど熱を入れて議論する場面はそうそうない。問題は、対話による「哲学的探究」に対するそれぞれの態度の違い（従ってファシリテートの仕方の違い）であったように思える。Stanは、ある程度の図式的な定式化を使っても構わないと考えていたようだが、Driesはもっと丁寧に参加者の Dissensus を拾いながら対話の展開を進め、そこから「哲学的探究」ができると主張する。また Dieter は、そうはいっても例や参加者の言明をどこかで選別する必要があるのではないかと言う。もちろんこの議論に結論は出なかった。そして、

休憩をはさんで最後に Dries がファシリテートしたときは、それこそ自分の考えをデモンストレートするかのような丁寧なファシリテートを実現させてみせた。それは、先に述べた「一般的規則・原理の発見」といった定式を一切使用することなく、ただ参加者の間に生じる差異 (Dissensus) だけを頼りにして、参加者にある種の発見 (変化) を生じさせるような方法を、よく示していたと思う。

7. Contingency and Necessity in SD

我々 (本間・堀江) のプレゼンテーションに関しては、まず「偶然／必然」という用語の使い方が少し突飛で分かりにくかったようである。しかし、コミュニケーションのプロセス (それを「偶然性の利用／必然性の発展」の「ジグザグな道行き」として説明した) に着目して、対話 (SD) における「豊かさ」の条件を理論化しようとした、その主旨は少なくとも伝えることはできたと思われる。

質疑応答 (覚えている限りで) では、まず Dries が「必然性とコンセンサスはどう違うのか、同じことなのではないのか」と質問してきた。私は「対話においてコ

**1日のプログラムを
終えたらビール！**
(イギリスフォトアルバム4)



ンセンサスが生じ発展するその条件を問題にするために「必然性」という言葉を使ったのだ」と答えた。またGiselaは「対話のプロセスはいいけれど、そこでJusticeの問題はどうなるのか」と質問してきた。これについては私は上手く答えられず、他の参加者からの横やりも入ってうやむやになった。

その他Sbastiaanが「発表の事例の中で参加者がだした言明には（まるで「ことわざ」のような）典型的日本的な思考様式がある」と言った。これは我々に対する質問なのかそれともSebastiaanの所感なのかよく分からなかった。どうやら対話によって出されてくる結果が、対立の契機をあまり含まない同質的なものであることに興味をもった（不満だった？）らしい。私は、それは事例の中の参加者自身が出した結果だから、それをあだこうだと評価するつもりはない、少なくともそこで参加者は自分達の共通(同質)な前提を見つけたのだから、と考えた。しかし後で、この議論はけっこう重要なものかも知れないと感じた。なぜなら、

それは対話によって出て来る成果が「外部視点」をどのようにして取り込めるか（取り込めないのか）という問題に通じるからである。

発表も質疑応答も終って休憩になってから、ドイツで数学のSDをやっているRainer Loskaが話しかけてきて、「君たちが言っていた「必然性の発展」と似たような考えをしている理論がある」と教えてくれた。それはRainerが最近著した本に引用されてもいるので、と彼の本を見せてくれた。また彼と後で話す機会があったが、そこで彼は、数学のSDにおいて「feeling」が重要な役割を果たすこと、それはどんなSDでも同じことを説き、我々の考えと似ていることを示唆してくれた。

発表ではガラにもなくアガってしまった私だが、とにかく無事に終えられた。司会を務めてくれたKeith Hammondも、発表前の打ち合わせでは「君たちの発表は抽象的すぎるので概念を正確に定義したほうがいい」と心配してくれていたが、終りには「予想以上にすばらしかった」と言ってくれた。（ほりえつよし）



本会議のリーダーたち
(イギリスフォトアルバム5)